

話者指向副詞とフェイズに基づく副詞の認可

水 野 江依子

1. 序論

副詞の研究は形態的・統語的・意味的観点から様々な研究が行われてきているが、その一つに副詞の比較的自由的な分布をどのように統一的に説明できるか、という問いに対する研究がある。様々なアプローチがある中で、1990年代後半からは特に (i) 副詞は意味的に関連する機能範疇主要部の指定辞に生起するという指定辞分析 (cf. Alexiadou 1997, Cinque 1999, Laenzlinger 2004) と、(ii) 副詞は付加位置に生成されその分布は意味的制約によって説明されるという付加分析 (cf. Ernst 2002, Costa 2004, Geuder 2004) の二つの考え方が主流となってきたといっても過言ではないだろう。

しかしながら一方で、この二つの分析にはそれぞれ問題があるということも多くの研究で指摘されている。このような指摘を基に Mizuno (2010) は、この二つのアプローチとは異なるフェイズに基づく認可システム (1) を提案した。

(1) Phase-based analysis of adverb licensing

Adverbs are licensed when they are locally c-commanded by their licensors within a phase domain. (Mizuno 2010)

そして補文標識層に属する発話行為副詞 (speech-act adverbs) と認識状態副詞 (epistemic adverbs) を使ってその妥当性について検証を行っている。¹ この提案は補文標識層副詞の分析においてはかなり有効なものであるという結論に至ったが、その妥当性を示すにはさらに広範囲な検証が必要であろう。

本論の目的は、屈折層に属する副詞の一つ、主語指向副詞 (subject-oriented adverbs) の分布を検証し、(1) で示した副詞の認可システムの妥

当性について今後の展望を探るものである。

本論の構成は次のとおりである。2節では指定辞分析と付加分析の理論的・経験的問題点を指摘し、3節で Mizuno (2010) で提案したフェイズに基づく分析について概観する。4節ではフェイズに基づく分析を用いて、主語指向副詞の統語的・意味的振る舞いについて説明する。またそこから導き出される帰結についても論じる。5節は結語である。

2. 先行研究の問題点：指定辞分析と付加分析

2. 1 指定辞分析

指定辞分析とは、Cinque (1999) に代表される分析で、副詞は意味的に関連する機能範疇主要部によって指定辞・主要部関係のもと認可されるというものである。意味的に関連する機能範疇主要部として、Mood や Mod などが挙げられ、これらが固定された節構造位置に投射されていることによって、副詞の厳密な語順関係が説明できるとしている。

具体的にみてみよう。(2) で示したように、発話行為副詞 *honestly* は認識様態副詞 *probably* に先行できるがその逆は非文となる。

- (2) a. *Honestly*, he *probably* had his own opinion of the matter.
- b. **Probably*, he *honestly* had his own opinion of the matter.

(2a) では、(3a) に示したように *honestly* と *probably* がそれぞれの認可子である Mood と Mod の指定辞位置にあるため、適切に認可される。一方 (2b) は、(3b) に示したように適切な認可子の指定辞位置に生起していない。よって非文となる。

- (3) a. [_{MoodP} *Honestly* Mood [he [_{ModP} *probably* Mod [had his own opinion of the matter]]]]
- b. *[[_{MoodP} *Probably* Mood [he [_{ModP} *honestly* Mod [had his own opinion of the matter]]]]

しかしながら、副詞が指定辞位置でのみ認可されるとすると、生起する位置

が厳密に固定されてしまい、(4) で示したような副詞の自由な分布が説明できないのではないかという指摘もある (cf. Ernst (2002))。

(4) (Probably) they (probably) will (probably) have read the book.

Cinque (1999) はこの指摘に対し、副詞は該当する認可子の指定辞位置で認可されその位置に留まるが、その一見したところ自由な分布は V や DP の移動によって派生されるのだと反論している。しかしこの主張も、V や DP の移動する動機付けが曖昧であるということ、また V や DP の移動先が曖昧であるということから不十分であるといえよう。

2. 2 付加分析

付加分析とは、Ernst (2002) に代表される分析で、副詞の分布を制約するのは (5) で挙げた意味的な規則であるというものである。

(5) Fact-Event Object (FEO) Calculus

Any FEO type may freely be converted to any higher FEO type,
but not lowered. (Ernst 2002: 53)

FEO Hierarchy は (6) のように指定されている。

(6) FEO Hierarchy

Speech act > Fact > Proposition > Event > Specified Event

(2) の分布を用いてこの分析について具体的にみてみよう。(2a) は Proposition を項としてとる *probably* が Speech-act を項としてとる *honestly* の作用域に入っているため容認可能となるが、(2b) は合致していないので非文となる。

しかしながらこの分析にも問題がある。例えば (7) で示したように、発話行為副詞は文頭に現れる場合は発話行為の解釈をもつが、文末に現れるときは様態の解釈となる。

- (7) a. Honestly, John has spoken about the truth to his teacher.
- b. John has spoken about the truth to his teacher honestly.

Ernst (2002) はこの違いについて、副詞が PredP に付加した場合は様態の解釈をとり、そうでない場合は話者指向副詞の解釈をとると説明している。しかしながらこの説明は規定であって、それではなぜ PredP に付加すると様態の解釈をとるのか、という根本的な問題に対して何の説明にもなっていない。また、副詞の分布は基本的には意味的な制約によって説明されるという Ernst の主張と矛盾するものであり問題であると言えよう。

3. フェイズに基づく分析

前節で指摘した問題点を基に、Mizuno (2010) は付加分析とも指定辞分析とも異なるアプローチで、新たな副詞の認可システム (1) を提示した。(8) としてここに繰り返し表記する。

(8) Phase-based analysis of adverb licensing

Adverbs are licensed when they are locally c-commanded by their licensors within a phase domain.

この提案では、(i) 適切な認可子によって局所的に C 統御されることで副詞は認可され、(ii) その認可はフェイズ CP, vP を超えて行われない、ということが主張されている。

認識様態副詞の *probably* の分布を例として、この分析について概観してみよう。(4) でも示したように、認識様態副詞は文頭、助動詞の前、助動詞の間には生起することができるが、動詞句の前、文末に生起することはできない。

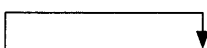
- (9) a. Probably they will have read the book.
- b. They probably will have read the book.
- c. They will probably have read the book.
- d. *They will have probably read the book.
- e. *They will have read the book probably.

ここでは Ernst (2002) や Laenzlinger (2004) に従い、認識様態副詞を認可する主要部 Modepistemic が C と T の間に投射される (10) の構造を仮定する。

(10) [CP C [ModP Modepistemic [TP [_{vP} V[VP V]]]]]

(11) に示したように、文頭に現れる認識様態副詞は TP の指定辞位置に生起する。この位置は認可子 Modepistemic の C 統御領域内であり適切に認可される。

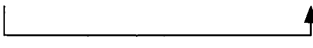
c-command -> licensing



(11) [ModP Modepistemic [TP probably [T^r they [T^r will [_{vP} have read the book]]]]]

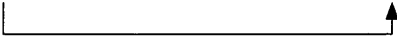
助動詞の前に生起する場合、(12) の位置に生起し認可子によって C 統御されるため適切に認可される。

(12) [ModP Modepistemic [TP George [T^r probably [T^r will [_{vP} have read the book]]]]]



助動詞の間に生起する副詞は、(13) で示したように _{vP} の端 (edge) に生起する。

(13) [ModP Modepistemic [TP George [T^r will [_{vP} probably [_v have read the book]]]]]



_{vP} はフェイズであるが、定義によりフェイズの端は接近可能である。

(14) *Phase-Impenetrability Condition (PIC)*

In phase *a* with head *H*, the domain of *H* is not accessible to operations outside *a*, only *H* and its edge are accessible to such operations. (Chomsky 2000: 108)

従って、この位置に生起する副詞は Modepistemic によって認可されると考える。


一方、動詞句の前および文末に生起する副詞は (15a-b) に示したように *vP* 内に併合 (Merge) される。いかなる操作もフェイズ *vP* を超えて行われないので、認可子 Modepistemic が *vP* 内部の副詞を認可することはできず、非文となる。

- (15) a. *_{[ModP Modepistemic [TP George [T' will [*vP* have probably read the book]]]]}
 b. *_{[ModP Modepistemic [TP George [T' will [*vP* have read the book probably]]]]}

またこの分析のもとでは、疑問文における統語的振舞いについても説明が可能である。(16) に示したように、疑問文では認識様態副詞は主語の後に生起することはできるが前に生起することはできない。

- (16) a. Where had the dog apparently gone?
 b. *Where apparently had the dog gone? (Ernst 2002: 429)

主語の後に生起する認識様態副詞は (17) で示したように *vP* の端に生起され、適切に認可されるため容認可能となる。

- (17) [_{CP} where [_C had [_{ModP} Modepistemic [_{TP} the dog [_{vP} apparently [_v gone]]]]]]
- 

一方、主語の前に現れる副詞は (18) で示したようにその認可子 Modepistemic よりも高い位置にあるため *C* 統御されない。

- (18) *_{CP} Where [_C *apparently* [_C had [_{ModP} *Modepistemic* [_{TP} the dog [_{vP} gone]]]]]]

よって非文となる。

以上、C 統御とフェイズに基づいた副詞の認可システムは認識様態副詞の分布について説明できることをみた。

紙数の都合上ここでは割愛するが、Mizuno (2010) ではさらに発話行為副詞の分布、発話行為副詞と認識様態副詞の語順についてもフェイズに基づく分析を行っており、補文標識層の副詞についての検証が行われている。

4. 提案

前節で示した C 統御とフェイズに基づく分析が妥当であることを支持するために、本節では主語指向副詞の統語的振舞いについて検証を行う。なお、本論では Mizuno (1999) に従い主語指向副詞は主要部 *Modroot* によって認可されると仮定し、(19) で示したように T と *vP* の間に投射されると提案する (cf. Mizuno 1999, Ernst 2002)。²

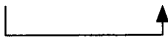
- (19) [_{CP} C [_{TP} T [_{ModP} *Modroot* [_{AspP} ASP [_{vP} v [_{VP} V]]]]]]

よく知られているように、主語指向副詞は文頭、助動詞の前、助動詞の後ろに生起することができる。

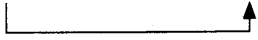
- (20) a. Wisely, she left the house at dawn.
b. Camilla wisely had paid her bills early that month.
c. Camilla had wisely paid her bills early that month.

(Ernst 2002: 105)

(21) に示したように、助動詞の前に現れる主語指向副詞は、*Asp* の指定辞位置に併合され则认为。この位置は認可子 *Modroot* の C 統御領域内であり、よって適切に認可される。

- (21) [TP Camilla [ModP Modroot [AspP wisely [Asp' had [vP paid her bills
 early that month]]]]]
- 

次に、助動詞の後ろにある主語指向副詞は (22) で示したように vP の端に併合される。vP はフェイズであるが、その端は接近可能なので認可子によって適切に認可される。

- (22) [TP Camilla [ModP Modroot [AspP had [vP wisely [v' paid her bills
 early that month]]]]]
- 

助動詞がない (23a) のような場合も同様な認可が行われる。この位置で *carelessly* は主語指向副詞と解釈されるが、この場合 (22) と同様に副詞は vP に付加され、適切に Mod に認可される。

- (23) a. John carelessly dropped the cup of coffee.
 b. [TP John [ModP Modroot [vP carelessly [v' dropped the cup of coffee]]]]]

(24a) で示したように動詞句の後ろに生起する場合、それは様態の解釈をもち主語指向副詞の解釈をもつことはできない。これは該当する副詞がフェイズ vP 内にあるため、認可子 Mod によって認可されることができないためである。

- (24) a. Camilla had paid her bills early wisely.
 (*subject-oriented / manner)
 b. [TP Camilla [ModP Modroot [AspP had [vP paid her bills early wisely]]]]]

(20c) で示した文頭に現れる主語指向副詞の派生について考察してみよう。もし、文頭に現れる主語指向副詞がこの位置に基底生成されるとする

と、(25) で示したように認可子 Mod_{root} の C 統御領域になく、誤って非文とってしまうため、本分析の反例となってしまうかもしれない。

(25) Wisely [TP she [Mod Mod_{root} [vP left the house at dawn]]]

しかしながら、しばしば言及されているように、文頭の主語指向副詞は基底の位置ではなく、話題化位置であると考えることができる (cf. Kuno and Takami (1993), Costa (1997), Mizuno (1999))。 (20c) は、まず vP の端に基底生成され、その位置で Mod_{root} に認可されたあと話題化のために文頭の位置へ顕在的に移動すると考える。

(26) Wisely_i [TP she [ModP Mod_{root} [vP *ti* [_v left the house at dawn]]]]

顕在的な移動を支持する証拠として、文中に他の副詞が生起している場合、主語指向副詞は文頭に現れることはできないことが挙げられる。

(27) **Wisely*, she had *unfortunately* left the house at dawn.

(Ernst 2002: 419)


(27) が非文となるのは *unfortunately* が介在しているため、*wisely* の文頭への移動は Relativized Minimality (Rizzi 1990) あるいは Minimal Link Condition (Chomsky 1995) の違反となるからである。³

次に、他の要素との語順についてみてみよう。(28) に示したように、主語指向副詞は認識様態副詞の後に生起することができるが前に生起することはできない。この語順関係は本分析においては自然の帰結として説明ができる。


(28) a. She probably has wisely returned the money.

b. *She cleverly has probably returned the money.

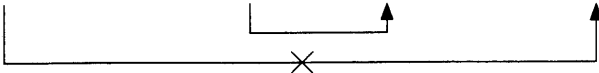
(28a) は *probably* が Mod_{epistemic} に、*wisely* が Mod_{root} にそれぞれ C 統御されているため適切に認可される。

- (29) [ModP Modepistemic [TP She [ModP probably [Mod' Modroot [AspP has [vP wisely

 [v returned the money]]]]]]]

一方、(28b) はそれぞれを C 統御する認可子が適切なものではないため、正しく認可されないので非文となる。

- (30) [ModP Modepistemic [TP She [ModP cleverly [Mod' Modroot [AspP has [vP probably

 [v returned the money]]]]]]]

あるいは、仮に (31) に示したように *cleverly* が AspP の指定辞位置に併合され、Modroot に適切に認可されたとしても、Modepistemic が *probably* の認可を適切に行うことはできない。なぜならば、*cleverly* が介在しているために、Modepistemic は「局所的」に *probably* を C 統御できないからである。

- (31) [ModP Modepistemic [TP She [ModP Modroot [AspP cleverly [Asp' has [vP probably

 [v returned the money]]]]]]]

助動詞との語順についても興味深い観察がある。主語指向副詞が助動詞の前に生起することはすでに見たが、助動詞が認識様態の意味をもつ場合、主語指向副詞はその助動詞に先行することができない。

- (32) a. Pete should (epistemic) carefully have crept out of there by now.
 b.?*Pete carefully should (epistemic) have crept out of there by now.
 (Travis 1988: 20)

認識様態の意味をもつ助動詞が Modepistemic の位置に生起すると考えれば、(32a) の構造は (33) のようになるだろう (cf. (10))。

- (33) [ModP Pete_i [Mod' carefully [Mod' should_(epistemic) [TP t_i [ModP Mod_{root} [AspP have [vP crept out of there by now]]]]]]]]

この構造において、*carefully* は Mod_{epistemic} に併合されるため認可子 Mod_{root} に C 統御されない。よって適切に認可されず非文となる。一方、(32b) は (34) に示したように、*carefully* は適切に認可されるので適格となる。

- (34) [ModP Pete_i [Mod(epistemic)' should [TP t_i [ModP Mod_{root} [Asp' carefully [Asp' have [vP crept out of there by now]]]]]]]]

以上、主語指向副詞と助動詞の間に見られる語順関係について本分析での説明が可能であることを示した。⁴

最後に、疑問文における主語指向副詞の振る舞いについてみてみよう。一般的に主語指向副詞はその位置に関わらず、疑問文と共に起しないということが観察されている。⁵

- (35) a. *Did John cleverly drop his cup of coffee?
b. *Carefully, why did she avoid her boss? (Haumann 2007: 333)

文頭に生起する主語指向副詞について考察してみよう。先に提案したように文頭に現れる主語指向副詞が話題化のため頭在的に移動したものであると考えると、*carefully* は (37) に示したようにまず Mod_{root} の C 統御領域内に基底生成され、その後文頭へ移動すると考えられる。しかしながら、(36) の split CP を前提とすると、ForceP 指定辞にある *wh* 句の前に話題化要素が生起することはできない (cf. Radford 2009: 333)。

- (36) Split CP Hypothesis
ForceP > TopP > FocP > F

- (37) *Cleverly_i [ForceP why [Force did] [TopP ... [TP she [ModP Mod_{root} [vP t_i [v avoid her boss]]]]]]]]

よって非文であることが説明できる。

ところが、主語指向副詞が疑問文の文中に現れる (35a) のような文に対しては、本分析では説明ができない。すなわち、文中にある *cleverly* は (38) で示したように Mod_{root} に C 統御されるために、誤って容認可能であると予測してしまう。

(38) *_{[CP Did} _{[TP John} _{[ModP Mod_{root}} _{[vP *cleverly*} _[v' drop his cup of coffee]]]]]

この点については今後の研究課題として残るが、しかし、1つ言えることは疑問文において主語指向副詞が生起できないのは統語的な問題ではなく、意味的な要因が関与しているのかもしれないということである。というのは、3節で述べたように、認識様態副詞などはそれが生起する位置によって適格性に違いがでてきている。これは明らかに統語的な制約が働いていることを示し、意味的な要因で説明することは難しいであろう。一方、主語指向副詞に関しては現れる位置に関係なく非文となっている。これはすなわち意味的に断定を表さない疑問文の意味的特性と主語指向副詞の間に何らかの意味論的共起制限があり、その結果共起を許さないということも考えられる。どのような意味論的共起制限があるのかを含め今後の研究課題としたい。

5. まとめと今後の展望

以上、本論文ではフェイズに基づく副詞の認可システムを用いて、主語指向副詞の統語的振舞いについて検証を行った。平叙文における主語指向副詞の分布は他の要素との語順も含め、(1) の提案で説明が可能であることが示され、その妥当性の証明に貢献できたのではないだろうか。一方で、助動詞の生起する位置、疑問文における意味的制約などいくつかの問題も残っており、節構造などのさらなる検証も含め今後の研究課題としたい。

注

¹ 節構造は補文標識層 (complementizer layer)、屈折層 (inflectional layer)、語彙層 (lexical layer) の三層に分けられる (cf. Haumann (2007))。

² Asp については、Felser (1999), Suner (2000) がそれぞれ独立した証拠でその妥当性について論じている。

³ Ernst (2002) は純粋な統語的説明では不十分で、意味的な制約も関与しているとの立場をとっている。

⁴ 二つの解決すべき問題点が残されている。一つは、(33)(34)における [Spec, ModP] への主語の顕在的移動の動機付けについてである。ここでは認識様態の助動詞が顕在的に存在するときのみ、助動詞との何らかの照合のために顕在的に移動するとし、該当する助動詞がない場合は従来どおり [Spec, TP] に留まるものとする。第二の問題点は (i) の対比である。

(i) a. She cleverly will hide behind a tree when he comes.

b. *She cleverly must hide behind a tree when he comes. (Ernst 2002: 105)

(ib) について本文で議論と同様に排除が可能であるが、(ia) については *will* の生起する位置によってその文法性の説明に問題が生じる。すなわち *will* が T の主要部位置にあるとすると、その上位に存在する *cleverly* は Mod_{root} の C 統御領域内がないので誤って非文と予測してしまう。*will* を vP 内に生起するものと考えれば説明が可能となるが、今度は *has* との共起の際にそれぞれの生起する位置に矛盾が生じてくるであろう。つまり、*has* が Asp に生起し *will* が vP 内に生起すると、**John* [_{AspP} *has* [_{vP} *will finished the work*]] という非文を誤って容認可能としてしまう。

この二つの問題は助動詞が節構造のどの位置に生起するのかという、より大きな問題となってしまう、本論の議論の範疇を超えているので今後の検討課題として残しておくたい。

⁵ (35a) は *cleverly* が様態の解釈 (=in a clever way) をする場合は容認可能である。

参考文献

- Alexiadou, Artemis (1997) *Adverb placement: A case study in antisymmetric syntax*. Amsterdam: John Benjamins.
- Chomsky, Noam (1995) *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In: Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.) *Step by step: Essays on Minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89-156. Cambridge, MA: MIT Press.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and functional heads: A cross-linguistic perspective*. Oxford and New York: Oxford University Press.
- Costa, João (1997) On the behavior of adverbs in sentence-final context. *The Linguistic Review* 14: 43-68.
- Costa, João (2004) A multifactorial approach to adverb placement: Assumptions, facts, and problems. *Lingua* 114: 711-753.
- Ernst, Thomas (2002) *The syntax of adjuncts*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Felser, Claudia (1999) *Verbal complement clauses: A minimalist study of English direct perception constructions*. Amsterdam: John Benjamins.
- Geuder, Wilhem (2004) Depictives and transparent adverbs. In: Jennifer R. Austin, Stepfan Engelberg and Gisa Rauh (eds.) *Adverbials: The interplay between meaning, context, and syntactic structure*, 131-166. Amsterdam: John Benjamins.
- Haumann, Dagmar (2007) *Adverb licensing and clause structure in English*. Amsterdam&Philadelphia: John Benjamins.
- Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami (1993) *Grammar and discourse principles: Functional syntax and GB theory*. Chicago: Chicago University Press.
- Laenzlinger, Christopher (2004) A feature-based theory of adverb syntax. In: Jennifer R. Austin, Stepfan Engelberg and Gisa Rauh (eds.) *Adverbials: The interplay between meaning, context, and syntactic structure*, 202-252. Amsterdam: John Benjamins.
- Mizuno, Eiko (1999) On the LF-movement of adverbs. *English Linguistics* 16: 303-328.
- Mizuno, Eiko (2010) A phase-based analysis of adverb licensing. *Gengo Kenkyu* 137.
- Radford, Andrew (2009) *Analysing English sentences: A minimalist approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi (1995) *Relativized minimality*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rizzi, Luigi (1997) The structure of the left periphery. In: Lillian Haegeman (ed.) *Elements of grammar*, 281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Suer, M (2000) The syntax of direct quotes with special reference to Spanish and English. *Natural Language and Linguistic Theory* 18: 525-578.
- Travis, Lisa (1988) The syntax of adverbs. ms. McGill University.